

第10回審議会における主な意見等

1. 学校選択制の検証で学区域制の時にも今と同程度の割合で学区域外に行っており、選択制によって子供たちがばらばらになったという事実がなかった。子どもの体力的、安全面から隣接学区域にした。
2. 教育的な観点でいい教育的環境にそぐわない状況が出てきた場合には、統廃合も、新しい学校を何とかつくる努力もしなければいけない。初めから統廃合有り無しということはない。
3. 「教育的観点」「教育環境の整備を第一」は、結局、数に集約しているのかという誤解を生みかねない。また、今の記述では地域の考えではなく、答申で決めることになってしまうので、掘り下げる必要がある。
4. 教育環境整備が即数量的なものを指すのではないことは十分に意識して審議してきた。数量的な側面、質的な側面があり、それには物的な環境、学校環境の整備や、先生方の授業力向上などソフト的な部分もある。行政は可能な限りの支援をしていくべきで、全面的な支援をしても望ましい教育環境が作り出しにくい状況が見えてきたら、いち早く地域にも情報提供し、統廃合ありきとかということではなくて、十分協議をする猶予も必要ではないか。
5. 望ましい規模を基軸に考えるのであれば、大規模校になった時には、学校を新設という結論になるのではないか。小規模校は統合で、大規模校は曖昧にしておく形は公平な議論に欠く。今回の答申では大規模校の議論を丁寧に説明する必要がある。また「下限を下回りながら着手しなかった学校の存在がある」と言ってしまうと、今の審議での議論とずれてくる。
6. 第一に第1章の段階で、ある程度の方向性が分かるようにし、安心を持たせるものであれば望ましい。どういう時に統廃合という話になるのか、要望が住民から出た場合とか、学校として機能しない規模とか（1クラスが10人か、15人か、複式学級にならないように、等人数はおのずから決まってくる）を出す。学校全体100人位、学級10人から15人位の警告する時期にそこからどう学校、地域の方々が努力をするのか、まず安心させるメッセージを出す必要がある。

第二に教育的配慮、教育的観点ということについて、もう少し一般の方々に分かりやすいように、これからの学校というのはどういう学校になってほしいのかを書く。いわゆる知識基盤社会で世界に競争していく力、競争だけでなく、共生してお互いにみんなが助け合っという考え方もある。切磋琢磨して学校が学校として機能できるような環境をつくりたいし、そういう環境でなければ意味がないというあたりを、もう少し丁寧に話す必要がある。

7. そこに住んでいる人たちの判断材料につながる答申にしていくべきだと思う。正確な情報を早めに出し、統廃合が起こるかもしれない地域は、そうならない対応ができるようにする。マクロ的な視点（通学区域の児童人口予測）、改築のスケジュールなどが必要。
8. 教育委員会として増える努力をどの程度やっていた方がいいかが保護者が注目するところ。区として、方向性は増えることはやっていますと言える方向にするべき。
9. 望ましい規模ということ論じるのであれば、個々の学校ではなく板橋区全体の競争力であるとか、発想の転換を変えてやっていくような学校の統廃合の議論にならないか。
10. 板橋区の教育が進めているのは、子供たちが主体的に授業に参加し、活発な論議をする中で学び合い、共同学習を通して生き生きした授業を進めること。そのためには、一定の数が必要で、競争するからではなく、一人一人がお互いの色々な意見を吸収することで成長していくというところで、望ましい規模が出されてきている。
11. 一般的な傾向として、大規模校になると先生の目が届きにくくなり、一人一人の個人が埋没しがちになる。特に小規模校の小学校から大人数の中に入った時に萎縮してしまう傾向があり、小1プロブレム、中1プロブレムという問題として、不登校あるいはいじめの問題に大きくかかわってくる。ある程度の大きさの規模を維持することが大切で、余り大規模校になり過ぎない方がということがある。

競争には自己実現という観点も重要な考え方ではないだろうか。自分が昨年よりも、昨日よりもどれだけ成長したのかを意識させるような、老人ホームの方々と触れ合うことによって思いやりが豊かになるとか、あるいは低学年の子供の面倒を見られるとか、情意的な部分での成長、そういう視点が大事だということもどこかに盛り込んでいくことが必要かと思った。
12. 中学校も小学校も同じように、ある程度の規模がないと教員の人数が絞られてしまう点について、全部洗い出しをやったはず。学校の中の先生もこのぐらいの配置にすると、とてもいい環境ができる、子供たちにとってプラスになるという視点は入れておくべきだと思う。
13. 規模と配置についての審議会なので、規模と配置を重点にした教育的な観点に絞らなければならない。どのように子どもたちに複雑になった社会を生き抜いていく力をつけさせるかということは、どの学校でも基本に置かなければいけないことだろう。統廃合の学校をおさめた経験の中で、1年生は6人しかいないので、学力をどれだけ伸ばせるか、担任の先生と色々やったが、1年生であっても誰は何が得意でと回りの子供の力を見てしまうし、自分でもそういうものと決めてしまっていく。担任教師の力だけではとても状況が変えられなかった。また、親の人間関係イコール子供の人間関係になってしまう。人間関係が変化するチャンスを与えるということで、各学年、複数学級が必要で、余り大きくなってし

まった時に問題が出てくるだろう。そのときに、どのような手立てが必要なのかということも考えていこうと小委員会としては出している。

14. 審議会としては、あくまでも教育的な観点から見て扱うということで「財政的な視点」という言い方をしない方がいいのではないかと。
15. 適正配置と全く関係なく改築計画を立てるとするのは、財政的に現実的には難しい話。今回、耐震補強工事を全部前倒して、かなり財政を投入してやり、3月11日のときにも大丈夫だった。本来は近隣の学校と適正配置ということを経点の一つに入れながら、耐震補強工事もできればもっとよかったがとても無理だった。これからは、きちんと整合性を持ちながら改築計画も立てていかなければいけない。
16. 区長部局からすると、子供の数が総体的に減っている動向からすると、まだまだ学校数が減ってもいいのではないかと受けとめ方をしていた。審議会を急がせたという経緯はあるが、現実には議論していると、統廃合がそんなに簡単にスムーズに行くというものでもないことは分かる。

学校数が減れば、将来の改築需要なども考えると財政的には非常にいい要素だが、一方で大規模校の問題もあり、仮に新設となると土地がなく、どこに建てるのかという問題が出る。古い学校全校改築という前提で試算し、昔、義務教育施設整備基金を作り何百億を貯める計画を立てたが、現実には計算どおりいかない。今改築を進めているところも、計画的に見通しができるところを具体化してやっておき、答申で触れていただくのはいいと思う。

現実にはやる時は財政が基本としてあり、必ずしも計画的にいかないことは、まああることだが、本来どうあるべきかというのは重要であると思っている。住民の皆さんとか、全部合意ができて、上手く進めていくような形になればというふうに受けとめている。
17. 我々としては、学校改築についても、配置についても、大規模校の問題についても、基本的なスタンスとしては教育の観点からまず考えていきたい。財政のことに気を遣い過ぎて自分を縛っては本末転倒になるので、例えば、「こうすることが望ましい」とか、我々の審議会の意思を、様々な形で区長部局にも生かしていただくような趣旨で、子供たちの幸せのためにということをして大事にした表現にしていきたい。